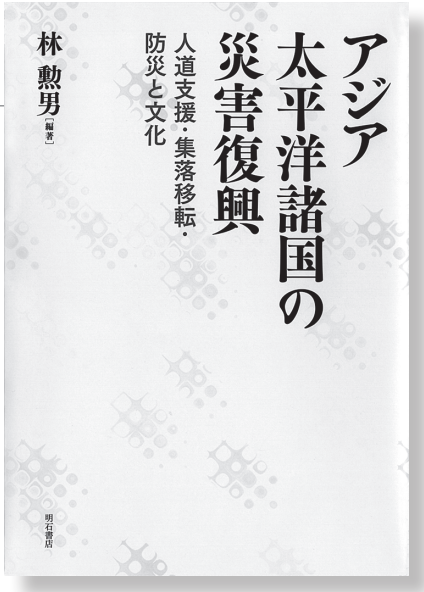
アジア太平洋諸国の災害復興
──人道支援・集落移転・防災と文化



林 勲男編著
明石書店／ 2015 年／本体　4,300 円＋税

自然災害の被災地に対しては、情報通信などの分野での技術革新とともに、過去の経験に基づく知識が体系化された対応策が取られる。しかし、対応に当たる者全員が最新の技術と知識に精通している訳ではなく、地元行政にとっては初めてのことばかりである。しかも、ハザード（地震や火山噴火などの自然界に発する災害因）は同じであっても、結果として生じる災害は様々に異なった様相を示し、それぞれの災害独自の問題が立ち現われる。1 つとして同じ災害は発生しない。そうした時、たとえば日本では、事案処理経験のある過去の被災地の行政担当者や、課題ごとの専門家が必要となるとともに、被災者が抱える問題とその置かれた状況を理解し、個人の生活再建と地域社会の再構築に向けて、微視的でありかつ包括的な対象理解に基づく支援が求められる。それが開発途上国の被災地の支援の場合は、当該地域の人々の暮らしやその背景となる歴史や価値観などの理解がきわめて重要となる。

本書は、災害発生直後の人道支援から地域社会の復興や個人生活の再建、そして将来の防災・減災を含めた地域の発展・開発という「災害サイクル」に沿って、7 つの事例研究を 3 部構成で紹介している。つまり、共通した課題を扱いつつ、個々の事例の個別性を詳述している。

第 1 部の「被災経験と人道支援」は、緊急人道支援から生活再建に至るフェーズに焦点を当てている。飯國有佳子は、2008 年 5 月にサイクロン・ナルギスがミャンマー南西部を襲った際の、一般市民による支援と被災者とをつなぐ活動について、「受援」という概念を手掛かりに、当時の政治状況に照らし、また、二者間の信頼関係が制度を支えるというミャンマー社会の特色に注目しながら記述・分析している。一方、2004 年のインド洋津波の被災地となったスリランカ東部と北東部沿岸は、内戦からの和平合意形成が模索されていた地域である。国連機関や国際 NGO なども被災地支援の活動に入った。しかし、翌年の後半に内戦が再燃し、支援活動は中止せざるを得なくなった。高桑史子は、ニーズがあるからといっても支援できる状況にはなかったことについて、歴史的背景を含めた政治状況から説明している。

第 2 部「集団移転」は、被災コミュニティの移転に伴う課題を取り上げている。パプアニューギニアでは、国土の 97 パーセントが慣習的所有地として集団によって所有・利用されており、土地は登記されていない。そのため、これまでも開発事業などに支障が生じることが多々あった。林勲男が調査している 1998 年発生のアイタペ津波の被災地でも、内陸や高台に新たな定住地を求めようとした際に、土地の権利問題が持ち上がった。かといって、土地の個人所有化や登記化は容易ではなく、またそれらが必ずしも問題の解決には向かわずに、権利義務関係のネットワークとして機能している社会に破壊的影響を与えかねないことを具体的に指摘する。南インドをフィールドとする考古学者の深尾淳一は、津波で被害を受けた文化遺産の修復・再建だけでなく、それらを取り巻く人・場所・時間が絡み合って生み出される「文化的環境」こそが、災害からの復興を考える上で重要だと指摘する。金谷美和は、2001 年のインド西部地震の被災地として支援が得られるようになったことで、染色を地場産業としている村が、深刻な水の減少と水質の悪化という災害以前からの問題を、新たな土地への移転によって解決しようする事業に注目する。開発途上国の災害では、発災以前から開発協力として活動している団体や組織を、支援側と受援側の双方がどう生かしていくかが戦略として重要となる。

第 3 部「防災と文化」は、開発途上国における防災支援の留意点を具体的に論じている。マニラ首都圏のマリキナ市には活断層が走り、近い将来に大地震の発生が懸念されている。一般住宅の耐震性を高めるため、耐震工学者の田中聡は、住宅建設に従事する職人たちの知識・技術の習得や仕事の受注方法に注目する。そして彼らが建てた住宅の引き倒し実験によって得たデータを分析し、脆弱性の低減策にもなり、さらには施主への経費負担も抑えられる改良工法を提案した。洪水の常襲地であるバングラデシュを研究する高田峰夫は、災害リスクと共生するための在来知に注目し、ハザードになりうる自然現象に対する住民側と国連機関や国際 NGO などの支援者側との認識の乖離を懸念する。近年、降雨時期や降雨量の劇的変化によって災害規模が拡大し、従来の在来知に基づく対応には限界が指摘されているが、無視できない指摘である。

本書は、民博の共同研究「災害に関する人類学的研究」（2004 年～ 2007 年）に始まり、2 つの科研プロジェクトによる現地調査ならびに関連するシンポジウムや公開講座の成果の一部であり、東日本大震災などの日本国内で発生した大規模災害においても重要な課題を扱っている。なお同じ一連のプロジェクトからは、『自然災害と復興支援』（林 勲男編 2010 年 明石書店）がすでに刊行されている。

文　林　勲男

国立民族学博物館文化資源研究センター准教授。専門は社会人類学・災害人類学・オセアニア研究。編著に『災害文化の継承と創造』（橋本裕之との共編 臨川書店 2016 年）、『自然災害と復興支援』（明石書店 2010 年）、『災害と共に生きる文化と教育＜大震災＞からの伝言（メッセージ）』（岩崎信彦・田中泰雄・村井雅清との共編 昭和堂 2008 年）など。